

## はじめに

近年、高等教育機関における教育の質保証が強く求められるようになり、学修時間の確保や単位の実質化、GPAの導入など、さまざまな課題が提起されている。大阪大学においても、教育目標とともに卒業時点で身に付けておくべき資質や能力を明示したディプロマポリシー、アドミッションポリシー、カリキュラムポリシーの3点セットを今年度中に策定することになっており、来年度はカリキュラムの大幅な見直しに着手する予定である。このような文脈で、人間科学研究科・人間科学部の教育に関する2013年度の外部評価が行われ、委員をお願いした京都大学の犬塚教授と広島大学の犬膳教授から、数々の貴重なコメントをいただいた。この場をお借りして、お二人の先生方にあらためてお礼を申し上げたい。

昨年、文科省によるミッションの再定義に関わって、人間科学研究科・人間科学部の沿革や設置目的をはじめ、その特色や強みを浮き彫りにする文書を作成したが、これらも参照しながら、部内評価委員会で「教育についての自己評価書」を作成し、外部委員の先生方に事前に目を通していただいた。また、外部評価の当日は、評価委員会の各先生方から、教育の実施体制や教育内容・方法・成果などに関する説明を行っていただいたうえで、外部委員の先生方との意見交換を行い、コメントをいただいた。

人間科学部は、日本の大学で「人間科学」を最初に名称に掲げた学部として誕生し、人間と社会に関わる学際的、実践的、国際的な研究や教育に取り組んできたが、それらが「世界水準の教育」につながっていると高い評価をいただいた一方、その独自性を「人間科学」のマインドづくりや汎用的スキルの育成を含む具体的な教育プログラムとしてより明確にするための工夫を行うことなど、さまざまな課題も提起していただいた。

本報告書が、教育の質保証に向けた次の課題を照らし出す道しるべとして、活用されることを心から願っている。

2014年3月20日

大阪大学大学院人間科学研究科  
研究科長 平沢 安政